

4月のコラム～ 大事にしていく『多様性』そこから広がる『可能性』

顧問先様のホームページで「2020年度人権啓発標語職場の部」で社員さんの作品が受賞されたというニュースを見つけました。

～ 大事にしていく『多様性』そこから広がる『可能性』～
いいですね！！タイトルに拝借させていただきました！

アメリカで、アジア系住民を標的としたヘイトクライム（憎悪犯罪）が急増しており、全米16都市におけるアジア系への憎悪犯罪は、前年の2、4倍だそうです。過去でも、経済不況が続く、貧富の格差や不平等が常態化すると、自分たちと異質な存在の排斥が必ず起こってきました。

第二次世界大戦中に、文化人類学者のルース・ベネディクトによって書かれた作品の新訳『レイシズム』（阿部大樹訳、講談社学術文庫）が、昨年4月に出版されました。なぜ、80年経った今でも新訳が発行されるほど読み継がれてきたのか？それが知りたくて本書を手に取りました。

レイシズム＝人種主義。人種によって生まれつきの優劣があるという思想です。これによれば、例えば、白人は黒人より優れているので、支配するのが当然だということになります。著者は、人種間に差異があることと優劣があることは違うということ、人類の進化の過程、歴史、文明の発展、生理学、遺伝、民族学といった様々な研究や調査から、レイシズムの矛盾を小気味よく論破していきます。

白人でも、貧困の中で育ち、十分な教育を受けられなければ、その才能を発揮することはできないでしょう。優劣は、人種の差によるものでなく、身を置いた社会環境、経済格差、教育の機会などに影響されるのはあきらかなこと。それなのに、なぜ今も解決されず、誤った解釈がまことしやかに浸透していくのでしょうか。

つまりは、レイシズムが政治的な利害関係からつくられ、戦略として利用されているということ。今でも、指導者が、自分たちの不安の原因が外国や移民にあると説明する手段は、不幸なことに大概上手くいっています。

ベネディクトは、「人種差別の本質は、人種そのものではなく、社会の不公正がまねく対立にある。だから、差別につながる社会状況を最小化することが必要。少数派も多数派も生活が保障され、将来への不安が消えれば、人種差別は減らせる。逆に他国民への恐怖を煽ったり、特定の人を辱めたり、社会参画を阻害したりすれば対立は激化する。つまり、誰もが取り残されないという意味での民主主義をきちんと機能させる必要がある」と述べています。

日本にも外国人が増えました。余裕がなくなると、人種の違いに限らず、性別、年齢、職業、個性…自分とは違う様々な差異を排除しようとして、長引く日常生活の制限や未知のウイルスに対する不安から「コロナハラスメント」ともいえる人権侵害も数多く起こっています。こんな時だからこそ、人としての根本にある大事なものを見失わないことが、未来への可能性を広げるのだと思います。

2021年4月 水田かほる